



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

5

ゲーテ

若きウェルテルの悩み 内垣啓一訳
親和力 佐藤晃一訳
ファウスト 第一部 手塚富雄訳

中央公論社

世界の文学 5

©1964

ゲーテ

訳者 内垣啓一
佐藤晃一
手塚富雄

昭和39年7月12日初版発行

昭和44年3月20日17版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
群・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

若きウエルテルの悩み

親和力

フアウスト 第一部

解説

年譜

3

129

391

552

574

若きウエルテルの悩み

編者から読者に

かわいそうなウェルテルの身の上に見つけだせるかぎりのものを、私は熱心に集めてきたのだが、それをいまお目にかけているにあたって、きつと諸君は私に感謝してくださるだろうと思っている。諸君は彼の精神と性格に対しては讃嘆と愛情を、彼の運命に対しては涙を惜しむことができないであらう。

さらに、彼と同じような促しを感じている善良な魂の持主は、どうか彼の受難から慰めを汲みとっていただきたい。そして宿業しゆくごうからか自分の罪障ざいしょうからか、近しい友だちを見つけることができな
いならば、このささやかな書物を友だちと思っただきたい。

第一卷

一七七一年五月四日

やつと離れられて、じつさいほつとしてゐる！ 親友よ、人間の心とは、じつにあてにならぬものだ！ これほど愛している、別れがたく思った君をあとに残して、しかもほつとしているなんて！ きつと、君は赦してくれるだろうね。だつて、ほかの人たちとの関係はまさに運命によって、ぼくのような心持主を怯えさせるために、選びだされたようなものではなかっただろうか？ とくに、かわいそうなレオノーレ！ とはいえ、ぼくには罪がなかったのだ。ぼくにどうすることができたらう——彼女の妹の独特な魅力がぼくをこころよく楽しませてくれたそのあいだに、情熱があのかわいそうなのと心にきざしたことに對して？ とはいえ——ぼくにはまったく罪がないだろうか？ ぼくは彼女の気持をおおりはしなかったか？ ぼくは自然な感情の嘘いつわりのない現われを——それはべつに笑うべきことではなかった

のに、ぼくたちをしょっちゅう笑させたものだ——いっしょになっておもしろがりはしなかったか？ ぼくはひよつとして……ああ、人間なんてあてにならぬものだ、自分で自分の苦情を言えるのだから！ ぼくは——愛する友よ、君に約束する——ぼくは心がけを改めよう。運命がわれわれに突きつけるわずかばかりの災難を、いままでもいつもしてきたように反芻することはやめにしよう。ぼくは現在のものを味わおう。そして過去のものは過去のものとしよう。たしかに、君の言つたとおりだ、ねえ君——人間どうしの苦痛はもつと少なくなるだろう、もし人間が——なぜそんな生まれつきなのかは、まったく不可解なことだ！——想像力をこんなにせつせと働かせて、過去の災難の思い出を呼びもどそうとするかわりに、むしろ無害な現在を我慢しようとするならば。すまないが、母に伝えてほしい——頼まれた用件はできるだけうまく進めて、なるべく早く報告するつもりだ。すでに叔母と話しあつたが、なかなかどうして、うちで思ひえがいているような意地わる女ではないことがわかつた。はきはきした、氣の勝つた女性で、きわめて善良な心持主だ。ぼくは遺産配分の差し押えについての、母の苦情を説明した。叔母は自分のほうの論拠や原因や条件をのべ、その条件さえそなわればよろこんでそつくりひき渡そう、しかもこちらが請求している以上に、

と言つてくれた。——とにかく、ぼくは今はこの件に關してなにも書けない。母に伝えてくれたまえ——万事うまくゆくでしよう。それにしても、ねえ君、またしてもこの些細な用件に当たつてわかつたことだが、誤解と怠慢のほうが奸策や悪意よりも、世の中のいざこざのもとになることは多いのかもしれない。少なくとも、あの二つのほうがまねなことはたしかだ。

それにしても、ぼくのここでの気分はまったく快調だ。孤独もこの樂園のような土地では、ぼくの心に注がれる貴い香油であり、この若葉の季節はありとあらゆる充実で、ぼくの凍えがちな心を暖めてくれる。どの樹木もどの生垣も、小さな花をちりばめた花束だし、いっそ黄金虫になつて芳香の海を漂いまわり、すべての養分をそのなかに見つけられたら、と思うほどだ。

町そのものの居ごこちはよくないが、そのかわりに周辺には、言いつくしがたい自然の美がある。それに心を動かされて故フォン・M……伯爵は庭園を、ある丘の上に造つたのだ。そのあたりは、いくつもの丘がきわめて美しい千変万化のうちに交錯して、とても気持のよい谷間を形づくっている。庭園は簡素なもので、一步入るとすぐに、学識だおれの造園家ではなく感情ゆたかな心の持主が設計して、自分自身をここで味わおうとしたことが感じられる。すでに幾度もぼくは故人のために、朽ち

はてた亭屋のなかで涙を流した。そこはむかし彼が好んですわつた場所だが、いまはぼくがそうしているのだ。やがてぼくはこの庭園の主になるだろう。庭番はまだ二、三日にしかならないのに、ぼくに傾倒している。そして今後も彼が、氣持を害されるようなことはあるまい。

五月十日

すばらしく晴れやかな氣分が、ぼくの魂をそっくり包んでしまつた——ぼくがいま心から味わっている、甘美な春の朝さながらに。ぼくは孤独だが、ぼくのような魂を持つ人たちのために創られたこの土地で、自分の生活を喜んでゐる。ぼくはとても幸福だ、ねえ君——安らかな生存の實感にひたりきつていて、制作がそのために進まないほどだ。いまはたとえひと筆でも、絵をかくことは無理だろう。そのくせぼくはいまだかつて、このような瞬間ほど偉大な画家だつたことはないのだ。なつかしい谷間がぼくのまわりに煙り、高く昇つた太陽がぼくの森の常闇のふちに安らい、ただ教条の光だけが神聖な内陣へしのびこむ。やがてぼくは流れおちる小川のほとりの、高く伸びた草地に寝ころんで、大地にいつもより近いせいか、多種多様な草たちをもの珍しく思う。ぼくは茎のあいだの小さな世界のうごき、芋虫や羽虫の数え

されず究めがたい形態を、ひとしお近く心に感じる。そしてその姿に似せてぼくたちを創った全能者の現前、永遠の歓喜のうちに漂うぼくたちを支え保つ全愛者の呼吸を感じる。友よ！ やがて視界がたそがれ、まわりの天も地もすつかり、恋人の姿かなにかのようにぼくの魂のなかに安らう——そんなとき、ぼくはしばしば憧れながら考えるのだ——ああ、これほど豊かにあなたたく胸のなかに生きているものを、おまえが再現し、画面に吹きこめることができたなら、それはおまえの魂の鏡となるだろう、ちょうどおまえの魂が無限の神の鏡であるように！——友よ——だがぼくは圧倒されて破滅する。これらの現象の壮麗さの力に、ぼくはうちひしがれてしまう。

五月十二日

ぼくにはよくわからないのだが、人を欺く精霊たちがこの土地のまわりに漂っているのかもしれないし、あるいはあたたかい天来の空想力がぼくの心のなかにあって、それが周辺のものすべてをまるで楽園のように見せるのかもされない。たとえば、町を出たばかりのところ、泉が一つあるが、その一つの泉にぼくは、メルジーネとその姉妹たちのように呪縛されてしまった。——もし君が小さな丘を下ってゆくと、アーチ形の門の前に出るだろ

う。そこを二十段ほど降りると、くぼみに澄みきった水が大理石の敷いてあるあいだから湧いている。泉の上をとりまいて囲いになっている低い石壁、この広場の周囲を蔽っている高い木立、あたりの冷気。それらすべては、まったく人を惹きつけ、ぞくぞくさせるものを持っている。ただの一日も、ぼくがそこに一時間ほどすわっていないことはない。そんなとき、娘たちが町からやって来て、水を汲むのだ。このまったく無邪気な、そのくせきわめて必要な仕事は、古代ヘブライの王族の娘たちもみずからしたことだった。そこにすわっていると、族長時代の觀念がいきいきとぼくのまわりに蘇ってくる。かれら族長たちはみな、泉のほとりで知りあい、求婚した。そして井戸や噴泉のまわりには、慈みある精霊たちが漂っていた。ああ、かつて一度も夏の日の苦渋な放浪のうちに、この泉の冷気によつて疲れを癒したことの無い者は、ぼくの思いに共感することもできないにちがいない。

五月十三日

君はわざわざ、ぼくが自分の本を送ってほしいかどうかを、たずねるのだね？——ねえ君、後生だから、本でぼくの首を締めることはほしんでくれたまえ！——もうこれ以上、指導されたり、激励されたり、鼓舞されたりす

るのはご免だ。ぼくの心はたださえひとりで十分にたぎっている。いま必要なものは子守歌だ。しかもそれを、ぼくはふんだんにわがホメロスのなかに発見した。なんとしらば、ぼくは子守歌で昂ぶった血潮を寝せつけることだろう。だって、ぼくの心ほど変わりやすく移りやすいものを、君はほかに見たことがないにちがいない。ねえ君！　いまさら君にこんなことを言う必要があるだろうか——しばしば心の重荷に耐えながら、ぼくが苦悶から逸脱へ、甘美な憂愁から破滅の情熱へと移ってゆくのを見守ってきた君に？　同時にぼくは、自分の心を病気の子供のようにいたわってもらいたい。どんなわがままも許してやるのだ。このことは、言いふらさないでくれたまえ。人によっては、ぼくを悪くともかもしれない。

五月十五日

この町の身分の低い連中はもうぼくを知り、ぼくを愛している——とくに子供たちが。だがぼくは、悲しむべき観察をした。はじめのうち彼らの仲間に加わり、うちとけてあれこれとたずねると、かならず数人が自分をからかおうとしているのだと思って、じつにそっけなくはねのけた。ぼくはそんなことに腹をたてはしなかった。ただ、今までにしばしば観察したことを、改めてまざま

ざと感じたのだ——いささかの身分のある連中はいつも、冷たい距離を凡俗な庶民から保ち、うかつに接近したら損をするでも思っているらしい。それに加えて、気紛者や有害な道化者がいて、腰の低い態度を見せることによって、その尊大をかわいそうな庶民にいつそう感じとらせようとする。

ぼくがよく承知しているとおり、われわれは平等ではないし、またありえない。しかしぼくの見解はこうだ——尊敬を保持するためにいわゆる賤民から距離をとることを必要だと思うような手合いが非難されるべきであるのは、負けることをおそれ敵から身をかくす卑怯者に劣らないからだ。

このまえぼくがあの泉へ行ってみると、一人の若い下女がいて、水甕を一番下の段に置き、誰か朋輩が来て頭にのせるのを手伝ってはくれないかと、あたりを見ていた。ぼくは降りていって、彼女をじっと見た。——「手伝ってあげようか、娘さん？」とぼくは言った。——「彼女は首すじまで赤くなった。——そして言った、「あらそんな、だんなさま！」——「遠慮することはないさ」——下敷を置きなおした頭の上に、ぼくは手伝ってのせやった。彼女は礼を述べて、昇っていった。



五月十七日

ありとあらゆる知り合いは出来たけれども、仲間と呼べるようなものはまだ一つも見つからない。われながら不可解なのだが、ぼくはきつとなにかしら人びとを惹きつけるものを持っているのだろう。じつに多くの人たち**が**ぼくを好いて、慕いよつてくる。だから、つらいことだよ——われわれがほんのしばらくしか道づれになれないとすれば。ここの連中はどんなふうだ、と君にたずねられたら、ぼくはこう答えるほかはない——どこもかしこも同じことさ！ つまるところ、人類なんて一つの型にはまった代物ものなのだ。たいていの人びとは大部分の間を、生きるための労働にすり滅らしている。そしてわずかばかり残された自由にむしろ怯え、あらゆる手段をさがし求めて、それから逃れようとする。ああ、人間のさだめ！

だが、ここの住民のまことに善良なこと！ ぼくはときどき自分を忘れて、人間にまだ許されている喜びを彼らとともに味あじわう——たとえばご馳走の並んだ食卓で、胸襟きょうしんを開いて冗談冗談を飛ばしあったり、馬車の遠出や舞踏会をしかるべき時に催したり、その他さまざま。それはまったく良い効果を与えてくれる。ただし、ぼくがゆめゆめ思いうかべてはならないのは——まだ多くの別なエネルギーが自分のなかにあるのに、それらはみな利用さ

れないままに朽ちてゆく、だからそつと隠しておかねばならない、ということなのだ。ああ、それを思うと、ぼくの心はすっかり締めつけられる。——とはいえ！ 誤解されることは、われわれ人間の宿命だろう。

ああ、少年時代の友だちだったあの女性は、もうこの世にいない！ ああ、いつそあのひとと知りあっていなければ！——いまのぼくは自分にこう言いたくもなる——おまえは愚か者だ！ この世で見つかるはずのないものを、求めている！ だがぼくは、かつてあのひとを捉えていた。あの心、あの偉大な魂に触れ、その前に立つと自分が自分以上のものに思われた——なぜなら、ぼくは自分の可能性のすべてだったからだ。恵みふかい神よ！ あのとき、ぼくの魂のエネルギーはただの一つでも、活用されずにいたでしようか？ あのひとの前で、ぼくの心が自然を抱くときのあの驚くべき感情は、そっくり発揮されずにいたでしようか？ ぼくたちの交わりは、きわめて優しい情感、鋭い機知の永遠の織物であり、その変わり模様はいくら歪ゆがんだものでも、すべて天才の目印を押されてはいなかったでしようか？ それがいまは！——ああ、さきに生まれたばかりに、あのひとはぼくよりも早く墓場へつれ去られた。ぼくはけつしてあのひとを、あの揺るがぬ気性と神々しんじやうしい忍苦を、忘れることはないだろう。

二、三日前にV……という若い男と会った。開けつびろげな青年で、とても好ましい顔だちをしている。大学を出たばかりで、叡智を備えたままで自惚れてはいないが、それでも他人よりは博識だと思つてゐる。それに勉強家でもあつたことは、なにかにつけて感づく点だ。とにかく、たいした知識の持主である。ぼくがしきりに絵をかき、ギリシア語もできる（この二つは、わが国では流れ星のような珍現象なのだ）と聞いたために、彼はわざわざぼくを相手にして、多大の学識を並べたてた——パトールからウツドへ、ド・ピルからウインケルマンに至るまで。さらに彼は断言した——ズルツァーの理論の第一歩はみな説破した、またハイネの古代研究に関する講義録を一冊所蔵していると。ぼくはただお説を伺つておいた。

もう一人、これまた立派な人と知りあつた。侯爵領の代官で、率直誠実な人だ。聞けば、彼が九人もいる子供たちにとりまかれてゐるところは、見るからに心のあたたまる光景だそうだ。とりわけ一番上の娘は、ひどく騒がれてゐる。ぼくを自宅へ招いてくれたから、なるべく近いうちに訪問するつもりだ。いま住んでゐるのは侯爵家の狩猟館で、ここから一時間半のところにある。そこへ彼は妻の死後、転居する許しを得た——この町で、しかも官舎にあいかわらず暮らすことは、ひどくつらかつ

たからだ。

そのほか二、三人の、いびつな変わり者にも出くわしたが、彼らのどこをとつて見ても鼻持ちならぬ。最も我慢できないのは、彼らの友情の押し売りだ。

達者でいたまえ！ この手紙は君にびつたりだらう、まったく歴史物語の体裁をそなえているのだから。

五月二十二日

人間の一生が一場の夢にすぎないとは、すでにいろいろな人たちの思つたことだが、ぼくもこの感情にいつもつきまとわれてゐる。よく目にするとおりに、人間の活動や探求のエネルギーは、一定の制約のなかに閉じこめられてゐる。あらゆる活動のおもむくべきは、欲求の充足を作りだすことだし、その欲求の目的はこれまた、われわれの哀れな生存をひき伸ばすことである。しかも、探求のあれこれの点に安心できるといふのは、すべて諦めが夢を見てゐるからにすぎない——つまり人間が、捕えられてゐる牢獄の壁に、色とりどりの形象と目もまばゆい風光を描いてゐるのだ。——これらいつさいのことを目にすると、ウィルヘルム、ぼくは黙つてゐるほかはない。ぼくは自分の内面へ帰つてゆき、そこに一つの世界を見いだす！ これまた、表現とか生動する活力とかと

言うよりも、むしろ予感と幽暗な欲求とが支配しているからだ。そのときすべてが、ぼくの五官の前を浮かびただよい、やがてぼくは夢を見ながら、この世界に微笑を送りつづける。

子供は自分の意欲の理由を知らない、という点では、学識あるすべての学校教師と家庭教師の意見は一致している。しかし成人でも子供とおなじように、この地上をよちよちと這いまわり、子供なみに、どこから来てどこへ行くのかを知らないし、負けずおとらず、真の目的にしたがって行動することなく、ビスケットやケーキや答で支配されている。このことは誰も信じたがらないのだが、ぼくが思うには、まったく手ぢかにつかめることなのだ。

正直にぼくの考えを言ってみよう——君がそれに対してなんと言うだろうか、わかっているのだから——最も幸福な人びとは、子供とおなじくその日暮らしをして、自分の人形をひきずりまわし、脱がせたり着せたり、ママが砂糖パンをしまっておいた引き出しのまわりをおそれるおそれる忍びあるき、願った物をやつかすめ取ったとなると、それを口いっばいに頬ばってから、「もつとほしいよ!」と叫ぶような手合いなのだ。——こういうのを、幸福な人種と言う。また幸いなのは、自分のけちな仕事や、ときには自分の情熱にさえも派手な名称を与

え、人類の福祉と繁栄のための大事業だと他人に押し売りするような手合いなのだ。——幸いなるかな、このようでありうる者は! だが謙虚な気持で、これらすべてのおもむくさきを認識している人——幸いに暮らす市民はみな自分の小庭をきれいに手入れして、楽園にするすべを知っているし、不幸な者も重荷にあえぎながら、儘まずに自分の道を進んでゆくし、誰も彼もひとしく心にかけているのは、この太陽の光を一分間でも長く見ることだ、という事情のわかっている人——そのような人はもの静かで、自分の世界をも自分の内面から作りだし、そして一個の人間であるがゆえにやはり幸福である。しかも、どれほど制約されてはいても、彼はたえず心の中に自由という甘美な感情を、そして望むときにはいつでもこの牢獄を捨てることができるという感情をたたえている。

五月二十六日

君が昔から知っているように、ぼくの性に合った住み方は、どこか親しみの持てる場所に小屋を建てて、あらゆる制約に耐えながら寝泊まりすることだった。ここでもまた、ぼくは小さな広場を見つけ、それに惹きつけられていた。

町から約一時間のところに村が一つあって、ワールハイムと呼ばれている。丘ぞいのその地勢はともおもしろく、上の方の小道づたいに村を出ると、とつぜん谷間がそっくり見わたせる。ある酒場の気だてのよいおかみさんが、年をとってはいても、愛想よくはきはきと、ぶどう酒やビールやコーヒを飲ませてくれるのだが、なによりもすばらしいのは、枝をひろげて、教会の前のその小さな広場を蔽っている二本の菩提樹なのだ。広場のまわりには農家や納屋や中庭が並んでいる。これほど親しみの持てる、しみじみとした場所は、いままでそう簡単には見つからなかった。だからぼくは酒場から小テーブルと椅子を木陰まで運ばせて、わがコーヒを飲み、わがホメロスを読むのだ。初めて、たまたまある晴れた午後、菩提樹の下へ来たとき、広場にはじつに人氣がなかった。みな野良に出ていたのだ。ただ、四歳くらいの男の子が一人地べたに腰をおろし、もう一人の六ヵ月ばかりの赤ん坊を両足の間にすわらせ、両腕で自分の胸にもたれさせ、つまり一種の安楽椅子の役目をしたが、黒い眼の奥からきよろきよろとあたりを見ているくせに、からだはまったくじっとさせていた。ぼくはこの眺めが気に入って、その向かいに置いてあった鋤の上に腰をおろし、兄弟の仲のよいポーズを大いに楽しみながら写生した。すぐそばの垣根と、納屋の入口と、壊れた荷車の

輪を二つ三つと、みなつぎつぎに奥のほうへ並んでいるとおりにかき添え、一時間もたったころには、いささかも自分のものをつけ足さないのに、よくまとまったとおももしろいスケッチが出来あがっているのに気づいた。おかげで、今後は自然だけを手本にしようという、ぼくの方針が強められたのだ。自然だけが無限に豊かであり、自然だけが偉大な芸術家を形成する。規則の利得について多くのことが言えるのは、市民的な社会を讃めるためにいろいろ言えるのに似ている。規則に従って自分を形成する人間は、けっして無趣味な、悪質なものを作りだすことはないだろう——ちょうど法律や作法によって型にはめられた者が、けっして我慢のならぬ隣人だとか、人並みはずれた悪党だとかになりえないように。だがまたその反面、あらゆる規則は、人がなんと言おうとも、自然の真実な感情と真実な表現を破壊するのだ！ お望みなら、君はこう言うがいい——「それはあまり酷い！規則は制限するだけだ、はびこる蔓草を刈りとるのだ」等々。——友よ、一つ比喻を持ちだしてもいいだろうね？ それは恋と同じことなのだ。ある青年がある娘に首ったけになり、朝から晩までそのそばで過ごし、あり

* (原注) 読者はこの本に名があがっている場所を、わざわざさがすことはやめていただきたい。余儀ない事情から、原文のなかにある本当の名前は変更しておいた。

つたけの活力と財産を費やして、彼女にすべてを捧げて
いることをたえず表明しようとする。そこへ一人の俗物、
何かある公職についている男がやって来て、こう言うと
しよう——「優しいお若い紳士よ！ 恋するのは人間的
なことですな。ただし、君は人間的に恋しなくてはいか
んだらうね！ 君の時間を区分したまえ。一部を仕事に、
そして休養の時間を君の恋人に宛てることだ。君の財産
を勘定したまえ。そして必要経費のうち余った分からは
、彼女に贈り物を——ただし、あまり度がすぎない範
囲で——することは、いっこうにとめませんよ。たとえ
は彼女の誕生日とか命名日とかにね」云々。——もしこ
れを守れば、一個の有用な青年が出来あがり、ぼく自身
がどこの領主にでも、彼を任用するようにすすめたくな
るだろう。ただ、彼の恋はおしまいだし、もし芸術家な
ら、彼の芸術もおしまいなのだ。ああ、わが友らよ、な
ぜ天才の流れはかくもまれにのみ氾濫し、高潮となつて
たぎり寄せ、君たちの仰天した魂を揺りうごかすのか？
——愛する友らよ、それと言うのも、沈着な紳士たちが
兩岸に住んでいて、その亭屋やチューリップ畑や菓草園
が破壊されては困るので、前もって堤防や疏水を作り、
将来迫るかもしれない危険を防止することを心得ている
からだ。

五月二十七日

ぼくはどうやら、感激と比喩と雄弁とに陥つたために、
例の子供たちがそれからどうなったか、終わりまで話す
ことをつい忘れていた。昨日の手に紙にとてもこまかく述
べておいた絵画的情感にひたりきつて、ぼくはあの鋤の
上にたぶん二時間も腰をおろしていた。やがて夕方ちか
くに若い主婦が、そのあいだ身動きしなかった子供たち
のほうへ、小さな籠を腕にやって来て、遠くから呼んだ
——「フィリップス、ほんとにいい子だったね」——彼
女が挨拶したので、ぼくはそれに答え、立ちあがってそ
ばへ歩みより、子供たちの母親なのかとたずねた。彼女
は、そうだと返事して、上の子に白パンを半分やりなが
ら、赤ん坊を抱きあげ、母親らしい愛情をこめて接吻し
た。「このフィリップスに赤ん坊のお守りをさせておい
て」と彼女は言った、「長男をつれて町へ行つてしまし
た——白パンと砂糖と土鍋を買いに」——見ると、どれ
も籠のなかにつめこまれていて、その蓋はとつくにはず
れていた。——「このハンスの（それが末っ子の名前だ
つた）晚御飯に、スープを作つてやろうと思います。腕
白小僧の長男が昨日、お鍋をこわしてしまいました——
フィリップスと重湯のお焦げを奪いあったもので」——
ぼくは長男のことを尋ねた。すると彼女が、草原で二、